

## 仏陀の心（１）

1. 縄文時代の終わり頃、インドの地で釈迦牟尼(仏陀)が行をしたのは、立場をはっきりとさせて、身を守るため。その手前(原因)には、時代の価値概念から離れることの必要性を、切に感じていた彼がいた。それだけで充分。当時の時代背景の中、彼は、彼なりの生を生きる。

思考型の発想をゼロにして、仏陀に触れると、彼にまつわる修行や悟りの世界が、全く違った意味合いで伝わり出す。人として、自他の生命を大事に生きること。彼は、普通の人。その時代は、それだけでも凄いことだった。

事実が認識へと変わる時、なぜそれがそうであるかの理由が外されたままだと、自由そのものの思考世界に要らない枠が生じ、事実の中の何でもない真実が、作り物のそれ(特別な真実)になってしまう。それを踏まえ、仏陀を知る。そして、彼の中の普通に学び、その普通を実践する。知識世界のどこにも存在しない彼を、経験枠内の思考で捉えることは出来ない。

2. 仏陀が人々に伝えた話は、説法や説教というものではなく、そのどれも、彼を通る、日常的で自然な理解である。誰に対しても、何の用意もなく、その人にとって大切なことを言葉に出来るのは、聞き手(受け手)が抱える悩み事や問題事の原因

HP「無有日記」

<http://www1.odn.ne.jp/mu-mew/>

が、彼の中には無い、歪で不自然な環境(社会)との関わりの中に在るため。彼はただ、自分の場合の普通を語り、そこに案内する。人は、その普通に触れ、癒され、安心する。

物事の本質を掴み、道を究めようとする人には、同じ問いでも、100通りの答を用意できる。彼には、求める結果も、残す形も無いので、そうではない人には、今居る場所から出られる道を必要なだけ差し出す。その気が無ければ、何度でも付き合い、そうであれば、温かく放って置く。後者は、すでに仏心となる。

仏陀の話の中での、喩えや寓話とされるものは、求め、さまよい、頭で分かろうとする人のための、当座の方便の類である。心のままに、自分に正直に生きる人には、それは必要なく、その人には、抽象的な話と、物事の本質そのものとなる言い回し(発想)で、その心を強くさせる。そんな人に、彼も学ぶ。

3. 仏陀が抱き続けた想いに、時を超えて自らを重ねてみるという、生命の体験。彼を知るのに、それ以外の手段は無い。彼の素朴で真剣な意思を、知識として知っていることで、不自由にさせてはならない。知識から始まる教えがあるとすれば、それは、一生を通して無責任に生きる人の、その体裁(体面)の道具である。

彼は、行という形を日々修め続ける。それは、その行為が、安全に過ごすためには一番の選択であったから。不穏な存在として力で抑え込まれる対象になることだけは、何としても

が始まる。(by 無有 11/08 2017)

避けたいがため、修行する姿を通して、世のあらゆる争い事とは無縁である姿勢を貫く。もちろんそれも、彼の本能的な行動である。

そして徐々に、求道関わりの因習全般から自由になり、自らの中に在るものの、その創造の力に身を任せるに従い、彼は、縁ある人たちの問いに、応え始める。それ自体が、何よりも修行となっていく。

4. 悟りの境地を仏陀が求めたわけではなく、悟りという世界が、彼に、その真実への理解を求める。人間の世界に、人間が生み出し得るその世界は、どこにも無いこと。それを探し求める思考(感情)自体が、悟りの真を歪めていること。それに気づき、思い出すことを、悟りは、仏陀に促し、そのための手段を講じる手立て(発想、縁の繋がり)を支え、その時(真に感得する時)を待つ。仏陀の悟りへの道は、その世界の、彼への要請である。

仏陀は、確認作業のようにして、悟りへの修行とされる行為に触れ、そのひとつひとつの本質を見極めるべく、経験と感応を高める。価値判断の域には居ず、心の自由と遊び、そして、そこを離れて、次なる新しい時を創り出す。すでに悟りは、仏陀と重なる。それを、彼は知ることはない。

悟りは、悟るものではない。悟りは、悟る人が創り出す、何でもない中庸の世界の、その普通の意味との融合(同一)である。

5. 悟りを、仏陀の生涯と結び付けて捉えようとする時、そこには、そんな気もなく真を外し(真剣に生きようとはせず)、その外れた場所から真を求めるその自らの姿勢に自己満足するという、他者依存の、人任せの自分がある。何をもって真であり、正しさであるかの、その手前の心持ちに真があれば、正しさが普通であり、その正しさも、大きく真を成長させ得る柔軟さと包容力を備える普通の姿となる。仏陀は、ただそれを実践したに過ぎない。

その過程では、いくつもの正しいとされる制約の中、何人も人の心を悲しませ、多くの人々の経験の記憶(正しさ、普通)との軋轢を経験する。それでも真を成長させるべく、更なる普通を選び、人の普通をやむ無く退けなければならないその理由の全てを受容した彼。仏陀が真ではなく、真を生きる普通を人生としたのが、仏陀である。

仏陀が悟りを開いたのではない。悟りの中に居る仏陀が、そのことに気づいただけ。その普通が、他のそれとは余りの違いがあったため、彼の姿は、多くの人たちの辿り着くべく理想の対象となってしまった。そのための、その後の在り様。この今に至る、仏教(宗教全般)の悲しい現実。この無有日記を通して、人としての普通の質を進化させる真の実践(悟りそのものの人生)を、共に具現化させる。それは、仏陀の望み(仏教)である。

8. その仏教の神髄とも言うべき、仏陀の原因の普通は、かつて彼と共に生きた、現代の道元の中から、力強く具現化する流れに乗る。仏陀は、この国での人間経験が僅か(2 度目)であることもあり、今回も、基本は支え役である。この国の、いくつもの時代に生を持ち、そのいずれの時も真を生きた彼女(道元)ならではの経験が活かされるよう、彼は、道元の今を応援する。この「仏陀の心」が次へと進む度に、彼女の心は軽くなり、彼は、そのことによる安心を、力に変える。

繋がる先の未来の風景を想う時、そこにも道元は居て、仏陀も、一緒にどこかに居る。この国は、未来に向けたその原因においてはとても重要な鍵を握る場所であるゆえ、彼女は、その時まで、自由に何度も生を生き、彼は、三度目の日本人を生きる。そして、「仏陀の心」の時を、共に振り返る。そんな風景を想う。

永いこと抑え込まれ、自由を奪われていた、原因を生きるという、人間本来の普通。仏陀の前の生の時から始まったそれは、3000 年の時を経て、力を取り戻す。その、人間本来が全く力無くなる程の負の原因の蓄積が、段階を追って確実に変わり行く(得る)ためにかかった、気の遠くなるような永い年月。でも、原因の世界から眺めた時、事はキレイに流れ、全ては、上手く行っている。人間の歴史を余裕で観るようにして変化し続けた生命の歴史は、仏陀を通して、その原因が力強く動き、道元を通して、その動きは具体化する。全ては、予定通り。そして、3000 年の休み時間は終わり、ここから、新たな時

7.人の生死を扱う専門職が、僧ではない。死後の世界をテーマとする教えも、仏教本来には無い。

仏教の本来は、人に、結果を求めさせず、原因を生きる人としての普通を、自らの在り様を通して人に伝え、その人を通して次なる風景に伝わる姿を、見守り、支えること。そこに在り続ける(変化の)原因がムリなく成長するためのその力添えを、自らの原因で行うこと。そこでは、生きることの本質が、そのまま本来であるゆえ、生きるための何かが力を持つことはない。支配(所有)欲も執着心も、居場所は無く、優越心も差別心も、そこに感情を働かせるそのことが、人には難しい。そんな心ある風景の原因でい続ける人たちのお手本となるような人生を生きる、僧。その様が、仏教と言える。

僧は、争い事の原因を知らず、不穏な関わりや不自然な事の流れを放って置ける経験も知らない。常に、自らを通して引き寄せられ、生み出される、友愛と調和、余裕と安心。その普通の中で、人は、生と死への感覚的理解を自然と成長させ、普通に生まれ、普通に死を迎えるその生の中での、人としてのあるがままを、その原因のところから変化に乗せ、次に繋ぎ続ける。人は、平和の意味を忘れて、あたり前に平和を生き、病むことのない時を、健全・健康に生きる。その風景を、さりげなく自然体で支え続けるのが、僧であり、そのことが、仏陀の原因との融合を普通としていることの証となる。

6.この国の歴史ビル2階の時(「歴史の芯」)、この地に、仏陀の教えとされる仏教が伝わる。その頃には、様々な思惑による解釈や権力による扱い等によって、すでに彼の真意からは程遠いものとなっていたが、それでも、この国に仏教の存在が入り込めたことを、彼の意思は喜ぶ。他の国には無い、中庸の精神が遥か昔から息づいている地。その本質は、仏陀の普通の素顔。どちらでもあって、どちらでもない感覚の中心を通り抜けるようにして形になる真の正しさは、他のどこでもないこの地に伝わったことで、その後、悪用され、歪曲されながらも、心ある人によって受け継がれ、生き存える。

仏教伝来後、それまでの負の(悪政、悪徳の)蓄積が一気に噴出するかのようになり、大きく世が乱れた、平安・鎌倉の時代。仏陀の意思は、その時を、未来への重要な原因創造の機会とする。そのためのかげがえのない協力者として、生命源からなる意思に照らしてずっと人間本来を自然体で生きていた生命と、原因の融合とその調整を重ね、その相手より先に、彼は、あの時(釈迦牟尼)以来初めて、人間時間の経験(転生)を選択する。彼は、後に道元となる子の父親としての人生を生きる。

7.この国の変革無くして、地球規模の負の連鎖の原因は動かないこと。自分が祖であるとする仏教が、宗教心を欠いたこの国の権力基盤の材料として利用されたこと。この地に生を選択するには、それらの把握だけでも充分であるが、仏陀が

最も重要視したのは、信じ難い嘘の力とそれによる苦しみの連鎖(蓄積)が、全く揺るがない程のかたまりとしてそこに在るにも拘らず、そのほんの小さな隙間(ひび割れ)に、光の粒のようにして辛うじて生きる、それ(負の連鎖)を決してそのままにはさせない意思が在ったこと。それは、自然界の生命(動植物)たちの望み。その生命たちと繋がる、心ある人たちの希望。それまでのどの時代においても、一人間が担う(果たす)べく生命としての責任を、当然のごとく表現してきたその存在の意思に、仏陀は、次なる時への更なる原因の経験を託す。彼は、徹底して援護する立場でいて、自らの経験と智慧の全てを、そのまま通し、より力強い原因へとそれを発展させ得る存在(道元)を支え続ける。時代背景的にも、それ以上無い性質のものを、二人は残し(生み出し)、それを未来に放つ。

8. 釈迦牟尼の人生以来、およそ1500年振りに新たな人間時間を経験することになった(することにした)仏陀であるが、道元の父親としての人生は、子の、心のままの歩みに寄り添い、彼を支えることを主としたため、形ある世界に折り合いを付けつつ、淡々と、確かな原因の供給役(空間創り)を生きる。二人は、思考を働かせずに為し得る形無き交流を密に、あらゆる経験(知識)から自由でいる生の質を強めていく。

その後、仏教の真から大きくかけ離れて暴走する、他の嘘の教え(教義、信仰)との融合から完全に自由でいるために、仏陀は、かつての経験を活かし、禅の時空へと、道元を送り

れへの対処に忙しい仏教は、邪教という言葉の次元にさえも加われない。

6. 本体と本人(身体)が違いを見せなくなる程の本来へと、人は、人間時間を通して、自らの生命の意思を成長・進化させていく。それを、自らの姿で伝え、繋ごうとした仏陀。そうにはならなかった原因を浄化すべく、それまでの負の連鎖を碎き得る更なる原因を、そのまま文字にした道元。そして、その全てがひとつに繋がり、癒される、「仏陀の心」の時。現代に生きる二人の中で、地球自然界の鼓動が連動する程の、生命の意思が息づく。

心と思考がひとつになれない理由は、誰にとっても要らないものであるから、その気もなくいつのまにか潜めてしまっているその原因を、深くから浄化し、取り外すために、この「仏陀の心」を自分と重ねる。本音(本心)と建て前(体裁)を使い分けられること自体、人間としては退化の現れであるから、そうではない時の原因の選択を連ねるために、この「仏陀の心」から、生き直しをする。生命としての人間の普通を遠ざける要因は、結果に留まり、過去に居続ける、重たい記憶(知識)。「歴史の芯」と「仏陀の心」は、本来へと向かうのではなく、本来から始まり、そうではないところを次々と削ぎ落す、生きる原因の道具。本体は、本人の、生命としての変化を、何より嬉しい。

な人たちは、僧の二枚舌に付き合わされることになる。

時間や善悪の概念も、生と死の経験も通用しない、多次元的な形無き意思世界(死後の世界)を、人間の、思考型の思惑で捉えることは、永遠に不可能であるのだが、そのことを感得する機会を持たされない人たちは、その普通では知り得ない世界を知っていると言う存在の、その神妙で奇妙な言動に、否応無く引っ張られて、洗脳状態となり、そこでの内容を、人知を超えた真実として受け入れてしまう。権威を持つ僧侶の中に、妄想癖のある自信家が居れば、天国も地獄も、好きなだけ形になる。それは、平安・鎌倉期に、多くの偽僧の嘘の道具となる。

5. 真の外れた仏教が、死後の世界に比重を置いたのは、苦しい生活や命の犠牲という、権力によって生み出される悲惨な状況に対して、人々に何の疑問も抱かせず、やむ無きこととしてそれを受け入れさせるため。そこでは、自分たちの後ろ盾となる有力者(支配・権力者)のための浄土思想が流行り、如来や阿弥陀仏も拵えられる。当然、民(人々)も、それに従わされ、死後の安楽のためにと、経験しなくてもいい苦しみと痛みを、ただただ受容する。

そのからくりは、権力による庇護のもと、正当なものとされ、現代に至っても、恐ろしく未熟で低次元な世界(宗教)では、欲と力のために、それは行われる。そこまで、仏陀の真を翻し、仏心ゼロのまま、仏教を弄ぶ僧たち。死後の世界の学びとそ

出す。仏教を本道に戻し、未来に繋ぎ得る要素としてその原因を力強くするための、その時代ならではの連繋の手段が、そこで生まれる。仏陀は、そのことに安堵し、優しく子を見守る。道元は、父の想いに応え、感じるままに、世のあらゆる原因を浄化し続ける。(by 無有 9/12 2017)

## 仏陀の心（2）

1. 次の時代のためになる現実の、その原因を、さりげなく真剣に生きる。それは、今を生きることの真実。真に生きることの、普通。そのために、淡々とすべきことをし、行くべきところへ行く。いつの時も、生きることは、次の風景への責任を普通とする。人は、どんな時も、繋ぐ意思を、生きる力とする。

そのための教えが、教えとして残されることはなく、そうである姿を温かく応援する大きな心が、それを実践する人の何でもない言動の中で、息づく。正しさも真実も、（結果に留まる）形ある言葉には無く、真を生きる人の正しさの中で、ごく普通の言葉と一緒に、風のように伝わる。そこに、個の経験は入り込めず、思考も感情も、どこまでも経験（記憶）から自由である。教えは、教えとしては存在せず、自然界に生きる一生命として大切なことをそのままに生きる姿と、そこから自然と生まれる生きた言葉（という名の生命本来の原因の具現化）が、人を導く教えである。

2. 生命の教えは、隔たりを作らず、優越や嫉妬とも無縁である。積み重ねる結果ではなく、次に繋がる原因の成長がその仕事であり、言葉から始まる心を知らず、心が言葉になるその原因に、優しく連れ添う。

真の教えは、自然で、変化そのもの。どんなこともそのまま

地での転生（の原因）は、想像を大きく超えた反動をもたらし、この国の仏教の、無くてもいいその不穏な原因の世界に、それまでにはない緊張を強いることになる。仏教は、彼の子によって、再スタートを切る。

（彼が、釈迦牟尼としての生を選択した時、西欧のある地域でも、同じように緊張が走る。そこでは、原罪と博愛（献身）を基とする偶像崇拜の流れが生み出され、苦しんでいる人の存在を前提とした、結果（形）重視の教えを最高のものとして、仏陀の原因との融合を退ける）

4. 奈良・平安期、権威ある有力者（権力者）たちに保護され、彼らによる（のための）仕事として仏教に携わる僧たちは、表面上は、人々の心を癒す立場を守りつつ、実際は、人々の生活全般を操る支配層のために生きる。権力者たちがこの上なく喜んだのは、僧侶たちによる、死後の世界の扱い。僧は、自分たちにも全く分からない（分かるはずのない）その世界を、まことしやかに描写し、嘘を並べ、思考では決して触れ得ない次元のそれを、まるで自分たちの特権のようにして扱う（嘘芝居を演じる）。人々は、彼らの言う、浄土や成仏の概念を信じ（信じ込まされ）、辛く苦しい生活をどうにかする（どうにかしてもらう）よりも、死後（生まれ変わり）に望みを抱くようになる。そのおかげで、支配層の存在たちは、人々に犠牲を強いやすくなり、彼らの人生（命）をどんな風にでも扱える愉しみを手にする。それは、鎌倉期になっても続き、普通に生きる素朴



2.この国においても、争い事を好む残忍な人間たちは、仏教がこの地に伝わる時に備え、そのための(それを形骸とするための)策を講じ、実行する。それは、歴史ビル 2 階の時に始まり、権力を笠に着る祈祷師や霊媒師(占い師)たちは、巧妙に僧を仕立て、彼らを、人々への影響力を持つ尊い仏僧として位置づけ、活躍させる。

衆生済度も如来も、涅槃(解脱)も因果も、そして、浄土(極楽)も阿弥陀も真如も皆、そこでの嘘の原因から生み出された、言葉(思考)のお遊びである。仏陀の真からは大きく次元の異なるそれらは、人の心の成長を止め、自らの原因(無意識の意思、本体の性質)への責任を放棄させる。差別や優越、支配や権勢の道具となるそれらの嘘の力により、仏教は、仏教ではない道を進む。仏陀の切なさが伝わる。

3.それ程恐れられていた、仏陀の本質とその原因。心の無い支配層は、仏教を悪用して、権威や形式を作り、人の暮らしを動きの無いものにしていく。生きることに精一杯だった人々は、不安や苦しみの原因(理由)に意識を向けることもなく、仏教にすがり、ご利益心を高めていく。そして、永いこと、この国は、偽りの僧(偽僧)により、仏陀の真が外された嘘の仏教を正しきこととして生きることになる。

それは、どこまでも盤石であるはずだったが、仏陀が再度生を持つ鎌倉期に、思いがけず、ひび割れを生じさせる。当時の社会の混乱振りにそれが象徴されるように、彼の、この

にはせず、あらゆるものを変化に乗せる。シンプルな原因で続けるそれは、過去に居座る形を崩して、生命世界を風通し良くし、結果にこだわる感情を溶かして、空間を次へと流れさせる。そこで、明らかに不都合(不合理)となるのが、権威と権力。特定の人たちのための教えも、特別とされる教えも、真の外された嘘の文字(言葉)の羅列である。

自然界(地球)に生かされる生命が、自然界の生命たちと共に生きる、その人間時間を人生と言い、それを基本に、人は、生命を生き、人間をやる。厳しさも愛情も、優しさも思いやりも皆、そこでの自然な普通の表現であり、厳しくする、されるといった平面的な関係性の原因は無い。正しき教えの世界では、常に、自然界と共に居る生命としての原因が、躍動的である。その全てが、仏陀の真意であり、道元と共に未来に放ち続けた、原因の世界での、二人の実践である。

3.特別な言葉を持たず、自らが、教えの原因となる在り様をそのままに、自然を生きた道元は、人としての生命世界の本質を通して生み出されること全てを受容しつつ、その自覚もなく、密度濃く、形無き抽象世界を浄化する。彼の言葉は、縁する人の心(の意思)を本来へと導く、生きる原因の鏡。その時々言動の必要性は、その瞬間を永遠の変化に乗せる、自然界の意思。

何も無い中で自然と生まれる言葉は、道元の中庸無限の心を通り、人の心へと流れ、そこで溶ける。思考が心の脇役の

## 仏陀の心（５）

ようにしてあるそこでは、何かのための言葉は要らず、自在にその(何かの)質を変え得る、言葉であって、言葉ではない(言葉の域には収まらない)言葉が、次なる原因としての、生命の仕事をし続ける。

湧き上がる想いをそのままに、心と言葉をひとつに、時(時空)を癒し続ける道元。その姿は、人間本来の仏心(宗教心)であり、仏教そのもの。彼は、友(父)に見守られ、仏陀(の時代)には難しかった心の具現化を実践し、生き続ける原因の言葉(文章)を、自ら形にする。それは、奇跡という名の、生命世界の普通。

4. 生命本来の普通(教え)をそのまま未来へと繋ぎ得るために、道元は、禅の道を志す。真を歪めて、仏教を悪用する世界との不要な衝突(軋轢)を避ける意味でも、それは重要なこと。彼は、禅の世界に、仏陀の本来を招き、そこでの融合を密に、その質を高める。そして、ずっと先の未来にまで届く仏心とその原因を、力強く重ねていく。

時代背景的にも、生命を生きる人間として唯一の選択となる禅は、かつて、(身を守るための)直感からなる必要性で修行の道に入り込んだ仏陀の人生と重なる。真に生きる上での基本形は、次の時代の(自然界が喜ぶ)原因となる現実を生み出し、それを人生とすること。道元は、仏陀の経験の質を消化し、自らも、推古朝での経験を活かして、仏心を繋ぐ。

道元禅の原因は、この時代に真の普通(仏教)を通し得た、

1. 太陽の優しさは、どんなことがあっても地球を守り、支え続けること。地球の健気さは、そのことに頼らず、けんめいに生きること。仏陀の心は、太陽のよう。常に中庸でいて、存在の全てで、他を生かし続ける。人の内なる意思に反応し、望むべく変化の機会を創り続ける。そして、自然界と人間世界を融合させる。

そんな存在が人間としての生を経験し始めた時、人間世界は、緊張する。その頃は、どこの地域でも争いが絶えず、力のある人間が他を支配し、人間らしい空間が侵され出していた時。非人間的な感情を普通とする人たちは、自分たちの本質(本体)が刺激され、その本性の遺伝子が生命本来のそれではないことが、仏陀の原因に触れることで顕になることを恐れ、彼らは、その原因を力無いものにするために手段を講じる。それは、仏陀の死後、本格的に行われる。

その存在たちは、思考を全開に、次々と形を残し(繋ぎ)、実を外した嘘で、仏陀の形無き原因の力をがんじがらめにする。彼を、悟りを開いた特別な存在として神聖化する(崇める対象とする)ことは、そこに在る普通を歪め、彼の真意の伝承を阻止するには格好の材料となる。

でいて、未来が喜び、地球(自然界)が安心する原因の選択を、さりげなく実践する。争いも病気も無い未来を思えば、自ずと価値観は、人間本来のそれとなり、地球のためになる原因を心に重ねれば、不安も居場所を無くす。そして、仏陀と道元二人がほほ笑みを交わす光景を想えば、何をするわけでもなく、みんなにとっての何かが空間を包み出す。その何かは、彼らの優しさであり、愛情である。

仏教は、仏陀の教えではなく、仏陀の普通。それは、(仏陀が伝えたと言われる)教えから始まるものではない、生きる原因の、(彼の)望むべく在り様そのもの。この国では、鎌倉期の道元から、その仏教は始まる。それまでのその(歪な仏教の)原因の修復に徹した彼の経験により、仏陀(父)は安心し、仏教は、永い空白の時を経て、本道に戻る。そして、今、彼らの想いを形に、無有日記が、その原因を未来に繋ぐ。この章を通して変化に乗る人たちの手で、仏陀の心は、次の時代に届けられる。(by 無有 10/28 2017)

仏陀の意思であり、道元の、その具現化である。仏教を語る時、それ以外は要らない。もちろん形としての禅ではなく、そこに在る、変化し続ける原因の性質と、永遠に生き続ける真の普通のこと。仏心(仏教)は、鎌倉期に、息を吹き返し、そしてこの時代に、心ある世界の普通となる。

5. 仏陀の尊い教えとされる、仏教。しかし仏教は、特別や直線上の概念を持たない、人としての普通。人間本来という自然体の在り様が、そのまま次なる原因でい続ける、生命の姿。その何でもないことが、普通になり得なかったこの2500年間に、真の仏教が人の心に染み込んだ(力を持ち得た)時代は無い。仏陀は、永いこと、その実を観続ける。道元は、淡々と(いくつもの人間時間に)、生命を生きる。

悟りの世界は、仏教には無い。この国の歴史的負の連鎖(の仏教関わりの背景)を思えば、それは当然のこと。自らの分を忘れ、悟りという思考が力(特別性)を手にするから、普通に大切にすべき普通のこと、外されてしまう。仏陀を、悟りと結び付ける時、それは、無知による無責任の極みと言える。自らの想いに正直でいることも出来ず、形に流され、物に引っ張られ、嘘を生きる。

人間は元来、悟りの世界を、その実感もなくあたり前に生きる、生命。その人たちは、悟りを知らず、仏教も知らない。そして、仏心をそのままに、(悟っているとしか思えない)普通の時を真剣に生き、その気もなく時を癒す。余計な思考を使ってい

る暇は、そこには無い。何かの裏返しではない、健康と平和の原因も、そこで、絶え間なく息づいている。仏陀の普通は、心ある風景の原因を生きる普通の人たちの、その心の姿である。

6. それを知れば、この国の人間は、仏教という世界を通して、どれだけムダな時間を費やしてきたかが分かる。そのムダな時間は、そのまま、争いと衝突(戦、争乱)の原因となり、仏教の世界には無いはずの、権威と権力を生み出す。それは、紛れもなく、仏陀の真が外されたことによる、仏教(宗教)の暴走。

自己本位に仏教を利用する人間たちが、道元の存在を煙たがり、排斥へと動いた理由は、(怯えからなる)真実への抵抗と拒否のため。そのための、人の心の世界の未成長(空白)は、後の、非人間性からなる重たい歴史を作り出す。この国の、仏心の無い思考型の存在(僧)たちは、真を歪め、正しさの質を低下させるのが得意である。

仏陀に触れる時、道元の心の世界との融合から始め、そこに在る彼(仏陀)の真意と、存在としての意思を、自らと重ねるようにして、思い思いに感じ取るのがいい。道元を、父として支え続けた、仏陀。その場所以外には、皆作り物(紛い物)の仏教があり、仏陀も釈迦牟尼も、存在しない。それを誰よりも知る、仏陀自身。だからこそ、(この国の)大きな転換期となる時に生を選択した、彼。二人の関係性は、この地球に生き

れ無しには真に生きることも出来なくなることになる。それへの感覚的理解は、これまで正しいとされてきた嘘を外し、常識とされる歪な普通から離れることで、その質を確かなものにする。

その本体の浄化には、仏陀の普通との、その原因のところでの融合が鍵となるのだが、そのことを、大和・飛鳥(歴史ビル 2 階)の頃から、本能的に把握していたのが、道元である。彼は、前の人生から、すでに仏陀を生きていたと言える。仏陀と同じ、縁ある人の本体(本質)を浄化し得る能力を持ち合わせる彼であるが、そう簡単ではない時代環境が連なる中、鎌倉期の道元は、未来に繋ぎ得る仏心(真の普通)の、その原因の成長を優先させる。それは、禅の本質であり、その時代の必要性の、唯一の姿である。責任ある原因を生きる時、人は、禅の中に、仏陀の普通を見、真の仏教が、その中を通して現代に届いていることを知る。

8. 道元の心を感じると、同時に、仏陀の心とも繋がり、仏陀の心と繋がると、この国に生きる一人間として、道元の心の意思のその純粹さに、心深くから嬉しさを覚える。道元が道元で居てくれたこと、それは、この国の貴い財産である。

心ある風景の原因を育み、成長させる仏教。そこには、直線的な思考は存在できず、向かい、求める感情も入り込めない。権威的な言説(法話)も、仏教は望まず、形(行為)から始まる行の類も、仏教には無い。いつ、どこに居ても、心に正直

なり、正しさとなる。

かつての身体時間と、身体を持たない(持つ前の)時間無き時間の二つをひとつに、それを次なる人生の(土台となる)大切な要素として感じ取るという、通常ではあり得ない感覚体験。その難しさも、ふといつのまにか、理由を必要としない安心と余裕の中に居る自分を通して、それが普通に生じることを学ぶ。難しさやあり得なさから始まるのではなく、そうでは無くなっている普通の時から始まる、原因の性質の成長。それまでが、ここに溶け、それが次なる時を創造する原因として動き出す、生命のままの人間の仕事。仏陀の前を見る経験は、すでに自らも仏陀であることの証である。彼は、その原因の普通を、何より喜ぶ。そして、その普通の前に、神や仏という言葉も要らなくなる。

7. 抽象的で多次元的な感性が、人としての基本要素であることが分かると、現象世界を形ある結果として見るものがなくなり、そこに在る形無き原因への責任をあたり前に、そこに引き寄せられ、生み出される次なる風景の原因として、それらを見るのが普通になる。そして、人の真は原因であり、それが本来であれば、人も社会も自然環境も、病むことはないことを理解する。

その原因の大元となる世界(原因)が本体であり、前の人生での経験の性質であるわけだから、その本体の浄化と人間時間における原因の成長が、この時、最も重要であり、そ

る一生命としての人間時間を本道へと導く、その原因そのものである。そして、彼らは、この時代に、再度(揃って)生を持つ。

7. 仏陀の言葉を思う時、そこには道元が居る。道元の世界(禪)を感じると、仏陀の想いがそのまま形になっていることを知る。二人は、知識を持たず(溜めず)、自らの生き方が縁する人の知識となって、真の普通の(人間の)ひな型でい続ける。言葉を選ぶこともなく、心がそのまま言葉になる彼らの姿は、否定感情とは無縁の、自然界の安心。彼らが共に、この国の、形を生み出す心の世界に関わったことで、動植物たちと、心優しき柔らかな人たちは、希望の未来を内に温め出す。

形ある結果からではなく、その手前の形無き心の性質から始まる原因を通して、現象世界を観る時、人は、いつのまにか、仏心と繋がる健全な感性を普通に、仏陀の精神と重なる自分を生きることになる。それは、原因が大切にされると、事の成り行きへの責任感覚が自然と備わり、仏教(真の教え)を歪める、ご利益心や依存心が外れて、思考型の論理や理屈(探求、到達)からも縁遠くなるから。そこには、自力も他力も無い。ただ実践する原因(の選択)の姿を通して、仏陀が笑顔を見せる。何も無くても、必要なことの全てを生み出す原因の力は、仏陀の心が何より通りやすい場所である。

8. 人は、地球上で生きているわけだから、そこでは、地球自然

界の望みと自らの生き方が、自然と融合することを基本とする。それを思う時、仏教の世界に少しでも縁していれば、信頼や期待という感覚は、人との間ではなく、地球自然界と自分との間で自然に育まれ、成長していくもので、自然界(動植物たち)に愛され、彼らの普通をさりげなく守り、支えていることが、この世の信頼そのものであり、人としての期待通りの生き方をしているということになる(ことを知る)。

自然界が喜ぶ、自然な生き方。そして、それを当然の義務として実践する人たちの、自然体でいる空間。そこに、仏教の真は在り、仏陀の心も息づいている。人が、人を想う時、その空間に、自然界に生きる生命たちの望みが普通に存在するか？彼らの期待に、その人は応えているか？仏教は、実にシンプルで、友愛に溢れている。

地球自然界が安心する原因が、その人の中で成長・進化する時、仏陀も、優しくほほ笑む。そして、限り無くその様を応援する。その全てが普通だから、仏心も宗教心も、どこまでも細かく、深く、地球に溶けだす。

仏陀の心が形になるという、これまでに無い原因の働き(躍動)に、時は、生命源からなる心の交流を力強くさせる。仏教は、芯を取り戻し、普通の人々の心と繋がり出す。(by 無有 9/26 2017)

同じ。時代への責任を普通に、時代の望みに応え、時代に身を預けるようにして、通るべき道を通る。それが、仏陀である。

仏陀のその姿を思う時、人は、同じように生きたいと思う。そして、そのために、彼の本質である本体(生命の意思)との融合が重要であることを理解する。今、それは、自動制御のようにして行われている。その意思を確かに、中庸の原因を生きる人の中で、新たな変化が始まっている。「歴史の芯」と「仏陀の心」に触れ続ける人の心は、要らないものを外しながら、仏陀の心との融合の時を普通とする。

6. 仏陀の一つ前の人生を余裕で感じられると、後に(身体を離れた後に)仏陀としての生を選ぶその手前の空白(実際にはその概念は無いが)の間の彼の本体にも、微妙に反応できるぐらい、その人の感性は進化している。その時、身体は、これまでのような疲れ方からは縁遠くなり、簡単には病むことのない精神が、心とひとつになる。仏陀の本体という、限り無く精妙で、力強い、自然界の意思そのものの彼の生命力との繋がりは、思考をいつも健康に、自由にさせ、生きる原因の力を、その自覚もなく生命本来に重ねて成長させていく。不安や怖れといった、結果発の感情も、そこには近寄れなくなり、気づけば、何かの裏返しでもなく、求めるものでもない、ありのままの安心が、心身を包み込む。仏陀が切に望んだのは、多くの人々のまさにその体験である。それだけで、生み出される現実、その原因のところから、あたり前に仏心を備える真と

## 仏陀の心（3）

そのための大切な機会の材料が、この「仏陀の心」であり、仏陀と道元との関係性への認識である。嘘の原因は、どこまで行っても本当にはなれず、嘘の裏返しの正しさに、力を与える。嘘の仏教も然り。思考や感情から始まる仏教を、仏陀は知らない。

「歴史の芯」を通して、地球が喜ぶ原因を生きることの大切さをさりげなく実践する人は、体験的知識の進化とともに、この時、本体の浄化を、実体験の域へと自らが招待する。仏陀と道元の力を借り、心と思考をひとつに、生まれ変わった本体を活躍させる。そして、生き直しを楽しみ、生きることの意味を大きく成長させる。「仏陀の心」の原因の中に在る真実は、縁ある人を皆、真の普通人にする。それこそ、この時代の望み、仏陀と道元の意味である。

5. 釈迦牟尼(仏陀)の一つ前の生は、その時よりおよそ 500 年前、同じインドの地で、彼は人生を送る。その時の環境や仕事、人との関わりなど、知ることはない。考えるまでもなく分かるのは、その時代の必要性に応じ、人として、その時々を柔軟に、感じるままに生きたこと。心に正直でいて、確かな原因をそのままに、さりげなく人の心(本質)を癒し、共に育む空間を流れさせていたこと。彼の本体が、そのことを伝える。

生きる原因における全体の必要性がそこにあれば、その時の人生の内容にまで触れ得ることも出来るが、時代背景がどんなであれ、彼は、彼自身を生きる。鎌倉期も、現代も、

1. 鎌倉期に生を経験した後、永く身体を持たずにいた仏陀(釈迦牟尼)は、この現代に、この国では二度目の人間時間を経験するに至る。仏陀が潜在させる能力は無限であるが、そのことを、現代の彼は未だ知らないでいる。それでも、約束通り、無有日記に継続して触れ得る場所に居て、その感性と形無き原因による表現力は、自由に仕事をし続ける。この文章にも、その性質は染み込んでいる。

現代の仏陀は、仏教(宗教)の世界での立場を持たず、普通の人として、男性を生きる。それは、何があっても志(自由意思)を失わずにいられるための原因(処方箋)として、この無有日記との縁を自然に維持できる環境が必須であったため。秘める力は桁外れであっても、彼の活動を妨げようとする(無きものにしようとする)存在たちの、その非人間性からなる働きかけは容赦なく、環境的にも、また不要な感情の重なりからも、あり得ない程の負荷を受ける。

そして今、彼は、「仏陀の心」に連動し得るこの時に間に合うようにして、内なる抽象と外の世界とを重ね合わせ、自らの原因(意思)からなる現象世界を創造するという、その強力な普通の力を発揮するところに居る。この 3 章への流れは、その時を引き寄せ、その心の意思を呼び醒ませる役を担う。仏陀が、この現代に、その生命の意思を携えて、人間を経験

しているということ。それだけで、時代は嬉しい。この時の訪れを、彼と共に居たたくさんの人たちが、祝福する。

2.歴史ビル 2 階での人生も含めて、何度もこの国での生を選択した道元は、仏陀よりも少し早く、この時代に生を持つ。仏陀と同じく、彼も、今回は仏教世界には居ず、女性としての普通人を生きる。その理由は、時代の必要性がそこには無く、心の世界のその原因のところからの浄化には、全くこれまでの価値概念とは次元の異なる対処が必要であるから。これまでの人生での全ての経験の質を、思考で扱わずにその原因のまま持ち合わせる(能力を持つ)彼女は、それらを次なる時代の原因の要素として活用してもらうことに徹する。無有日記は、それに応える。

どの時代の生でも、権力を笠に着る存在たちにならまれ、苦しんだ彼女は、その度に脳の働きを不自由にさせられ、無くてもいい経験を重ねてしまう。ところが、道元の生では、仏陀の支援もあり、脳の働きとは別次のところで、どこまでも原因の質を成長させ得る経験をし、そのおかげもあり、無有日記の中に在る、中庸・全体の原因との融合は、信じ難い程の深みのそれを普通としてしまう。そして、その分母を増幅させた原因のところから時代(歴史)の中身を見るという、彼女ならではの、人には無い能力を、無意識のところでは表現する。それも、仏陀とのかつての経験があつてのこと。道元としての人生は、彼女にとって、それ以外の人生での不要な原因を難無

歪な価値観に合わせるのが上手く、そのことによる精神の未熟さゆえに、世間的にも良い人でいようとする感情を強くする。

人が皆、真の自分をそのままに生きれば、嘘も無くなり、正しく生きることも、良いことをすることも意識されずに、自然に世は調和あるものになる。これらのことを考えるまでもなく、普通のこととして、(自らの)本質をそのまま生きる人は、その姿は誰にも理解できなくても、悟りの中に居る人である。要は、思考から始まらなければいい。

4.その普遍的とも言える、どうにも変えようのない本当の姿の性質であるが、限り無く中庸でいる存在の、その本体の意思と自らの生き方を重ねることで、なんとそれが変わり得る可能性を持つという、全く別次元の普通が存在する。別次元というのは、単にこれまで一度もそうにはならなかったための言い回しであるが、ずっとそこに在ったのに、誰も気づけなかったことと思ってもよい。

力の有る人が、力の無い人の人生(命)を奪っても罪にはならないという、未熟で愚かな時代を肯定してきた、この国の人々。その価値観(思考)の元となる脳の働きの性質が本来になれば、自らの真の姿(本体)を見つめざるを得なくなる。そして、そこに、地球の意思と重なる普通の原因が流れ込むことで、そのままではいられる本心(本人)へと、本質(本体)は変わっていく。



覚えるそれへと変わっていく。そして、ふとした時(瞬間)、それまではそこには無かったある性質のものが、ムリなく思考の扉を開け、何気ない発想となって、新たな自分に連れ添う機会を創り出す。

そこに、仏陀を活かし続ける彼の本体が在り、それと繋がることで、自らの無意識の中の本当の自分が変わり出す。縁する人の心(生命)の意思と自分の本体との融合は、釈迦牟尼としての生を持った時も、それ以前の生の時も、彼が何より望んだこと。手法でも方法(理)でもないその生命としてのさりげない機会は、どこまでも自由意思からなる、変化への望み。仏陀のその真の普通による経験は、思考の質を変えつつ成長し続ける人の、その原因の中で、あたり前に為される。

3. 身体を持って人間時間を経験している時はもちろんのこと、身体を終え、次なる人生を選択するまでの間をも変わらず生き続けている姿無き意思(本体)が、その人の本当の姿であり、人として生きる存在の本質である。その性質は、人間時間の内容如何で変化する次元には無く、その時、その場所で、人間らしく生命を生きる際の、その精神性を支え、見守るために、その意思は存在する。

それへの理解は、思考世界には無く、時代背景からなる価値判断も通用しない。その人間の本质関わりの世界に、善悪や高低(上下)といった二者択一的思考が在るとすれば、それは欺瞞である。本質(本体)が不穏で粗雑な人ほど、世の

く浮き上がらせ、それを活かさせてもらう力の源となる。

3. 仏陀の、他の人には無い個性は、本体という、脳と密接な繋がりを持ちながら、限られた身体時間での(人間としての)活動とその変化・成長全般を支える、その姿無き永遠の意思(の性質)が、至極強力で、叡智に富んでいること。そのことは、人としての心(原因)を持たず、不穏で悪質(低次)な本体を共とする人間には耐え難いもので、それゆえ、釈迦牟尼以降、自由に身体を選べなくなる程、この人間世界では彼の真意が歪められ、何もかもが仏教の本質からかけ離れた、嘘の教えが蔓延することになる。道元以前の仏教は、仏陀への拒否反応のそれと言える。

道元の個性は、その本体の意思を最大限に活かす身体活動(人生)を重ねて、人間としての生きる原因を驚異的に進化させ得ること。そのため、重く、動きの無い原因の世界からは、嫌悪の対象として尽く抑え込まれ(潰され)、その力を削がれるが、その度に、次なる生での原因にその全てを彼は活かしてしまう。仏陀が道元と共に人生を歩もうとしたのも、領ける。

互いは、唯一無二の、生命の仲間。共に居て、融合するだけで、それぞれが、個性ある表現力を高め、引き寄せる風景の質を本来へと変えていく。支え合い、協力し合う(補い合う)その関係性は、初めから、仏教(真の普通)の本道を歩むものとなる。

## 仏陀の心（４）

4.現代の仏陀と道元は、自らがそうであることは知らず、お互い、面識は無い。いつかその時を迎えるであろう二人は、本体(本当の自分、形無き生命体)の浄化をこの無有日記に預け、その過程での変化を、人間時間での経験の創造に活かす。

この時代だからこそ為し得る、染み込まされて(蓄積させて)しまっている負の要素の観察と、それへの対応。特に道元であった彼女の場合は、人としての真を生きる自分を基本としていたために、やむ無く引き込まれる幾多の要らない経験もあり、本体は、多くの傷を負う。その生命の意思表示の土台である本体が、この時(の EW)を通して癒されることで、いくつもの人生で彼女が向かわざるを得なかった、凝り固められた嘘の世界(歪められた仏教と真の無い教え)が、内側から崩れ出す時を迎える。それにより、道元の原因(意思)と自らを重ね得る人たちの心も軽くなり、心身は、重たい枷が外れたかのように、快活になる。

その姿を、道元の父親だった頃から望んでいた現代の仏陀は、ずっと自分では扱えなかった自らの本体の潜在力が、無有日記で揺さ振られ、導かれることで、より具体的に活かせることを知り、彼女(現代の道元)の経験の記憶の浄化と、それによる軽快な原因づくりに、力強く参加する。この時代に居る意味を、二人は、動き続ける新たな原因の中で確認し合う。

1.仏教は、釈迦牟尼(仏陀)の生き方から始まったわけだが、その生き方は、彼にとっては普通のことであり、他に類を見ない程の普通(人生)がそこに在ることを思えば、人は、その理由が何であるかに、心が動く。そして、言葉としての(彼が伝えたとする)教えからではなく、その普通の源泉となる彼特有の原因の風景から、自然と伝わり、感じさせてもらえることの変化・成長が、仏教に縁する人にとって何より重要であるかを知る。その時、人は、仏陀の前を見る。

そのことを自らの心に重ねつつ、感じるままに、仏陀の普通に触れていると、身体がそのまま心であり、心が常に身体となる、有と無が同一であるような、本体をそのままに本人(人間)を生きる彼が居る。彼の、全てであるひとつの中から流れ出す、ひとつひとつの全て。それは、真の普通の原因の鼓動。仏陀の前の人生でも、その前の人生でも、それは、彼自身である。

2.仏陀の前を思うと、そこには、その対象となり得るものが何も無いため、自ずと思考が働きにくくなるという、普通ではない思考状態が生まれる。そのまま、よく分からないながらも、淡々と漂うようにしてその場所に居ると、不必要に思考を使われないでいられるという、脳の働きにおいては、楽で、安心を

に、思考を忙しく、心を忘れ、仏教の真から離れて(離れさせられて)いくことになる。

その嘘の仏教の極み(大罪)となるものは、作り物の死後の世界を、人の脳にすり込み、人としての生における望むべく原因の世界を退けたこと。その恐ろしく危険な企ては、人間世界の真実への強力な抵抗の原因となり、そのまま、偽りの人生を正しいこととして生きる、勘違い人を増やす。そして、時代は、永い間、異常で非生命的な本体の意思を通す存在の手によって、苦しみや辛さをあたり前とするという、実に低次・低劣な仏教を続けることになる。

その幼稚でお粗末な(愚かな)様は、道元の時から、本格的にその原因への対処が為され、仏陀の力添えもあって、こうして、ここに、その内実が形になる時を迎える。仏教は、実に素朴で、単純である。そこにある嘘を外すだけで、そこでの体験的知識は、仏陀の真(普通)と繋がる。人間であれば、それは、とても簡単なこと。嘘の原因をさらりと浄化できるぐらいの正しさ(生命としての普通)の原因を生きる。(by 無有 10/11 2017)

5. 身体の次元に連れ添うようにして存在する本体は、時間の概念も生と死の経験も寄せ付けない、永遠の瞬間に居続ける生命の意思であり、それ自体が変化であり、一定であり続ける、多次元的な活動の核(集合体)である。それは、身体(本人)と本体が同一であった(違いが無い)時代には無かった認識。時を経て、心と思考がかけ離れ、無意識(本心)と意識(意向)が別のものとして扱われるようになり、いつしか、その本体という世界は、存在感を持ち得てしまう。そして、現代に至り、影響力を強めつつ、それは生き続ける。

本体の性質は、そのまま身体経験へと反映されるが、身体経験が本体に影響を及ぼすことは、殆ど無い。つまり、人間的に世のために生きる人が居たとしても、その本体が動きの無い非生命のそれであれば、その人を通して、結果、世は荒んでいく。本体が、変化し続ける生命本来のそれであれば、その人の人間経験がどんなであれ、世は平和の原因を強めていく。それは、生命世界のシンプルな真実のひとつ。

その本体が、生命本来の普通である人たちは、元々それが(その概念が)無かった時代に、心のままに感じる想いを人生(人間時間)としていた、自然感覚の自然な存在たち。その在り様が大きく崩れ始めた時、彼は、釈迦牟尼としての生を生きる。そして、自分への極度の抵抗と反発の結果(実際)を修復するために、鎌倉期に、再度人間をやる。三度目の現代、彼の本体は、その全てをこの無有日記にゆだね、存在そのもので、望むべく未来の原因となる。

6.力を持つ人間が、力を持たない人間を支配するという、その非人間的な価値観をまかり通らせてきた、人間の歴史。それは、次第に、本体の次元の様相を変えるまでになり、より悪質な本体が、同質他の本体を支配するという、実に奇妙で、恐ろしい状態を作り出していく。残忍で凶悪な人間経験が、それを普通とする性質の本体の影響力を強め、より強力な支配力を身体活動に重ねる中、本体は、狡さと緻密さ、操作力と破壊力を備えていく(強めていく)。

その異常を普通とする経験の性質は、全て、本体の中に染み込み(取り込まれ)、転生の度に異なる人間(身体)時間の中で活かされる(悪用される)わけだが、その存在たちは、記憶を呼び覚まされるようにして、この現代、それを浮き上がらせてしまう。時代背景がこれまでとは異なる今、無有日記は、無くてもいいはずのものを隠し持つ存在の、その本体の世界に対応する。心無い人間の本体を自由に操る程の力を持つ存在の、その本質(本体の影響力)を、心ある人たちの世界から外す。3章は、そのための場所となる。

7.その存在たち(特に彼らの本体を支配する程の強力な本体を持つ存在)によって、自由に生きる姿勢を奪われ(潰され)、多大な負荷をかけられながらも、いつの時も、人間本来を真剣に生きたのが、道元の生を経験する彼女である。そして、その様を知りつつ、身体時間を選ぶタイミングを阻まれても、どうにか(奇跡的に)道元の父親の生を経験するのが、仏

陀としての人生を持つ彼である。

仏陀と道元の合流は、地球自然界の全ての生命たちの希望の具現化と言える。そして、そのことが、この今に繋がるということ。それは、かけがえのない原因の増幅であり、地球と人間との生命の約束である。この「仏陀の心」の文章に乗る、これまでに無い沙(淘ぎ)と羅(連繫)の原因により、彼女(道元)が引き受けてきた負の蓄積は砕かれ、彼女関わりの多くの人の生き直しが始まる。彼(仏陀)は、その変化の時を、形無き抽象世界から支える。

その姿は、かつての二人の共同作業の現代版である。二人の繋ぎ役のようにして在る無有日記は、時代が望む地球感覚を基本に、自然界の生命たちの活動を元気にする。彼らは、そこで安心して、本体にある重しを外し、厳しい時代での経験が癒される時を過ごす。時代は、地球自然界と共に生きる本来をテーマに、変わらざるを得なくなる。

8.仏陀の真を歪めて、それを良しとする妙な世界と繋がりつつ、力を手にした低次の仏教は、自分たちの我利我欲の元(原因)となる邪な本体を隠すために(見えなくさせるために)、魂や霊という言葉を生み出す。そして、人の思考が触れられないその嘘の原因をごまかしつつ、形式や形ある結果に、人の意識を引き込む。そこに、権威・権力という、仏陀の世界からは大きくかけ離れた要素を取り入れることで、人々は、次第